

雨の恋情

平 龍生

1

六甲山の稜線に寄ると、卸（おろ）しの風が吹き、瀬戸内の海にと歩み出すと、柔らかな海風にも頬を撫でられる。どちらも快い。

そんな、港町神戸の街合いが好きで、坂戸正秋はこの地に住み着いた。もう、都合三十有余年、彼はこの街と共に過ごして来た。

他郷に住んだこともありだが、やはり、この地には愛おしさの情があり舞い戻って来た。

賑々（にぎにぎ）しさが溢れた市街地にと足を踏み入れると、いつとき、海や山の存在など忘れてしまうことがあるが、それはそれで、また、生きている人間の様に触れることが出来て、彼は楽しみも見付け出していた。

三宮から北に上がった生田新町の小路の一角にある「ロブ・ロイ」という名のバーのマスターとして、彼は、もう十数年この方、この地の人間模様なども眺めて来た。人々の機微の様にも少しは接して来たということだ。

街の小路に踏み込むと、港町の風情、ロマンとやらがあちこちで甦る。何しろ、昔は外国の船員、海の男たちもやって来た場所なので、それなりの風情が残されているのだ。

この「ロブ・ロイ」の名も、赤毛のバーという意味で、スコットランドの義賊、ロバート・マクレガーの愛称として知られる。

「こちやこちやした路地の奥にある雑居ビルの二階に「ロブ・ロイ」はあ

った。

控えめの小さな看板も古くなっているの、人目にも付き難いが、それでも何とか、常連の客に支えられて、このバーは続いていた。

いつとき、この街に腰を据える前のこと、彼は東京で女性専科のカメラマンの助手をしていた。まだ、二十歳過ぎたばかりの時、彼はプロのカメラマンになる夢を抱いていた。

朝から晩まで手当はなしで終日働かされた。

それが修行というものだったが、或る日、この世界がつくづく嫌になった。彼が恋人のつもりになっていた交際相手のヌードモデルが、こともあろうに、彼を捨てて、先生の愛人になるに及んで、意を決した。

自分の夢も捨てた。

高校卒業時まで神戸に住んでいたこともあり、東京暮らしを止めて彼は神戸に安住の地を求めた。やり直し人生も厳しさがあるもので、紆余曲折（うよきよくせつ）もあつたが、バーテンダーの仕事をやっている内に、気ままにやれる自分の店が持ちたくなり、親の遺産の一部で、ロブ・ロイを、居抜きで買い受け、オーナーになった。

彼が三十四歳の時だった。坂戸正秋はつい先日、四十六歳になった。バーテンダー歴だけなら、ざっと、二十年ほどにもなる。

時の移ろい、その様々な人間の模様の中で、何人かの忘れがたい人々がいる。

バーのカウンターに席を占めた客たちの生き様（ざま）、いま、振り返れば、その一時（ひととき）のおのれの触れように未熟さなどを感じて忸怩（しじくじ）たる思いがするのだが、どれも過去のことので取り返しはつかない。

覚束（おぼつ）かぬ間に間に、時間だけが過ぎて行つたのであつた。

「この店、お気に入り。わたし、マスターの顔が見たくて。舞い戻って来たんだ」

この日、開店早々にやって来たのは宮原真由美だった。髪の毛の長いミュージシャン風の若い男と一緒で、スタンドの止まり木に真由美は席を占めた。真由美の縮れたカーリーヘヤーは金髪に染められていた。

「わたし、ソルティドッグ、あんた、奢（おご）りなんだから、水割りにしておく？」

「ああ」

生返事な答えが返って来た。所在なげに、男は長い髪を掻き揚げた。

注文を受けて、ソルティドッグを坂戸は作り始めた。1940年代にアメリカ西海岸の若者たちに人気のあったカクテルで、ソルティドッグとは船の甲板員のこと、ウォッカをベースに、グレープフルーツジュースで割る。作り方には作法があつて、あらかじめ塩でスノー・スタイルにしたタンブラーに氷を入れ、ウォッカを注ぐ。そのあとに、二、三倍のグレープフルーツジュースで満たし、軽くステアにして出来上がりとなる。

二人の話題は、近頃のポップ曲についてであった。この仕事をしているお陰で当世の音楽事情にも坂戸は詳しい方だった。

その話を小耳に挟みながら、坂戸は別のことを考えていた。去年の秋、真由美は、東京の実業家と称する男と結婚をした。

余計な詮索はしないのが客商売のマナーだから、坂戸は真由美には訊（き）かなかつたが、見るところ、離婚をして真由美は神戸に舞い戻って来たふうである。

カウンターに二つ、グラスが並んだ時、それとなく、その間の事情を真由美が漏らした。

「わたしバツイチ、お金のなくなった男つて、わたし、大嫌い。そういうことお」

「ああ、そういうこともありやな」

とだけ、坂戸は言い、多少の愛想笑いも浮かべながら真由美に応じた。

いま、真由美の隣にいる若い男は彼女にとって、何人目の男かとも考えて見る。

坂戸の記憶では真由美は二十六歳のはずで、男は成人式前の年齢のように思えた。

店の造りは、スタンド席を入れて、やっと二十人ほどが入れる程度だった。縦長に位置するフロアーにはボックス席も用意されていた。店の売りと言えば、英国の船員が置いていったというダーツ盤で、年代物なので、壁に掛かっているだけで、バーらしい雰囲気醸（かも）し出してきていた。

ダーツ同好会^{ダツツドウコウカイ}も、この店にはあつて、一年に二、三度、不定期ではあつたが、常連客の連中がチャンプを選ぶ会を開いた。

客に言わせると、昔ながらのバーの名残りがあつて、俄か造りのレトロ風を気取った店とは、一味も二味も違うということになる。

「やっぱりわたし、神戸が合っているのよね。この街、好きい。落ち着けるわ」

「そら、真由美ちゃんが生まれ育ったところやからな。空気も合っているのや」

「そうみたい」

連れの男が水割りのお代わりをしたので、タンブラーに坂戸は氷片を落とし込んだ。

いつもの癖で、ちよつと坂戸は機嫌が悪くなった。

真由美のような女性は余り好きではない。しばらく東京に居たからと言って、東京弁で喋ることもあるまいと思つてもいた。東京で暮らしていたことのある者のこれは妙な反発心の故（せい）かも知れない。

その時、電話が入った。

坂戸が受話器を取ると、若やいだ声が返つて来た。

「わたし、来週の日曜日、神戸に帰るんや。久しぶりい。絶対に、マスターの顔を見たいから、店は締めんとつてね。行くのはわたし一人、マスターの顔を一人で眺めていたいんや。ええでしょう？」

こちらは、ばりばりの神戸弁だった。地元出身の今売り出し中のジャズ

歌手の麻生詩織が相手だった。元は、この店の常連で、彼女は売れない音楽仲間と共に、焼酎のサワー割り一杯で長時間ねばる有難くない客だったが、夢追い人の夢に賭けて、坂戸は嫌な顔一つしなかった。

終戦後から続く北野の老舗ライブハウスの出演をきっかけに、麻生詩織はチャンスを掴んだ一人だった。

「そないなこと、わかってるてえ。お客一人でも店は開いてるさかいにな」嬉しくなり、坂戸は声を弾（はず）ませた。神戸の街を忘れていない者に会ったような気になり、坂戸は機嫌を直した。

ちやらちやらと、いちやついていたカウンター席の二人が坂戸の方に顔を向けた。

「ねえ、彼はね。東京の音楽ブロのプロデューサーから、レコーディングの話が来ているのよ」

「へえー、それで今夜は前祝いってわけや」

「当たり前、彼ね。舞台に立った時は、すっごくセクシイんだから」

「馳走さまつてところやな。その話は」

誰彼と区別はしたくしなかったが、二人は薄っぺらな人種のように坂戸には思えた。

夢を追う者のひたむきさ加減には、それなりに、どこか感じ入るものがあるものだ。

いつか、この店先で、自慢気に真由美が見せたことのあるエンゲージリングは、もう、彼女の指にはなかった。代わりに、派手な彫金の指輪が嵌められていた。男のジーンズスタイルに合わせてか、真由美もデニムでまとめており、Gジャンに、大柄の花模様のシャツ、首には銀色の星の連なったハンドメイクのネックレスを掛けていた。

「おっ、雨になって来よった。今夜は降るといふ天気予報やったさかいにな」

カウンターの裏の小窓に当たる雨音を、耳聴（ぎと）く坂戸は聞き分けた。五月の季節、好天が続いていたのに、時ならぬ梅雨前線の走りの雲が

九州方面から東上中であった。

「この時間からの雨やと、客足はなしやな」

坂戸は独りごちた。雨の気配を察すると、早々に二人は席を立った。ゆっくり腰を落ち着けての飲み客でもなかった。さつきから、何やら、そはそはしている二人の挙措（きよそ）が目についていたので、坂戸は止めたりはしなかった。

店を出て、東門筋から生田神社に抜け、坂道を上ると、ラブホテル街になる。二人の気持ちは、すでに、愛とやらを共有するための時間にと向けられているようである。

「おい、傘を貸したるう。相合傘（あいあいがさ）いうのんも悪うないでえ」

勘定を払った真由美に坂戸が声を掛けた。『ロブ・ロイ』のある場所は車は停められないのでみんな徒歩でやって来る。それで、雨に足止めされる客もありなので、いつも店には何本かの貸し傘が用意されていた。

「濡れちやいそうだもんね。傘貸りるわ」

また、真由美が東京弁で答えた。アクセントだけは、こちら訛りが残っている。

男と肩を並べて、真由美は店を出た。坂戸が店の扉を開けるなり、鋼鉄製の外階段に、飛沫（しぶき）が跳ね返るのが見えた。

2

一人で雨脚を眺めた後、坂戸は扉を閉めた。外は大層な降りになっている。しばしの間、飛沫（しぶき）だけ脳裏に残った。

「ほんま、どうもおれは雨には弱いようや。わが心にも雨が降るちゆうタ イプやなんや」

この彼の呟きは、客足のことではない。

男と女の話、それに雨にまつわる話なら、彼自身にもいくつかの物語が

ある。

ずっと彼は独身を通して来たので、この商売をしていると、客の女性と危うい関係になることも間々あるのだった。

雨が勢いを増したらしく、小窓を強く打つ音が聞えた。

夏の夕立ちの季節にはまだ早いのに、篠（しの）付く雨と言った表現がぴったりの雨模様となったようだった。

自分の居場所のカウンターに戻り、坂戸はグラスを磨き始めた。

客が来なくとも、ぴかぴかに磨かれたグラスの並ぶ棚を見ているだけで、この店を一人し占めしている気分になれる。

三千種類は揃えてある酒も全部、自分の所有物のようにも思えた。

次に、カウンター席に、思い出の中の女たち、をそれとなく坐らせて見る。今夜は、雨との由縁（ゆえん）とやらにも寄せて、終生、忘れ得ぬ女性の一人を左隅の席にと坐らせた。時ならぬ思いが沸いた。

彼にとっては、楽しい話ばかりではない。

幻の光景を追っているだけのことだったが、過去の一コマでも、鮮烈に甦って来る話はあるものである。

哀しい結末が用意されている話は、やはり、忘れ難いものだ。

八年前のこと、坂戸正秋と旧姓時友知里は、男と女の関係になったことがあった。

離婚をした彼女には三歳になる男の子がいた。

元々は、常連客であった元亭主の山藤秀光との縁で知里と坂戸は顔見知りになった仲だった。結婚から離婚に至るまでのすべての経緯を坂戸が知っており、知里の相談相手になったばかりにこの悲劇が起きた。

「わたし、もう、彼のことなんかどうでもええの。裏切られたんは悔しいけど、今更、何を言うても始まん話やもんね。そやけど、あんまし、（*余りに）あの子があの人に似ているもんで、子供の顔を見てるのんが、わたし辛い。それで、こんなにかかしてると思うけど、わたし、あの子が疎ましくて、知らぬ間に、遠避けていることがあるんよ」

カウンター席で、暗い表情のままに知里が漏らした繰り言が、いまでも、坂戸の頭の中には焼き付いている。

顔の造りが男親似で少しも可愛いくないと、リアルな話も知里は口にした。知里の辛い思いが、坂戸にも伝わった。

その後、事の推移の末のほどを坂戸が知ったことだけのことだったが、実は、一連の話には、納得出来ぬ思いが残った。

二人が別れる羽目になったのは、坂戸にも責任のあることのように思えたのだ。

山藤秀光はフリーの商業デザイナーで、坂戸が知る限り、広告業界での仲間の評判もよかった。飲むのはストレートのバーボンだけで、商売柄、少しく、かっこをつけたタイプとは読めたが、本性まで腐っているとは坂戸も気付いてはいなかった。

「結局、広告の仕事いうんは、ほんまらしい嘘を吐くのが、商品売るためのコンセプトになるんやないか」

得意げに、仲間うちの連中に彼は語ったことがあった。

耳聴く、坂戸はその文句を聞き付けたことがあった。

話は広告の在り方のことのように、直接には、坂戸には関心のあることではなかったので、それとないおいしいコピー文句の羅列をする商売か？そんな思いを坂戸は抱いただけのことだったが、生来の嘘つき男、とまでは山藤秀光の事を判断出来ずにいた。

そんな或日、一人でやって来た山藤秀光に妻との離婚話の調停役を頼まれた。もつともらしい筋書が用意されていた。

デザイナー修行を積むために、本場ニューヨークに行きたいと、彼はおのれの夢について語り、しばらくの間の別居生活を妻に求めたが、聞き入れられないと苦情を漏らした。

マスターの大人の話は説得性があるので、妻の知里に、男の夢、とやらを解き明かしてやってはくれないかと、この男は口にもした。

つまりは、事を成さねばならぬ、男のロマン、というやつで、男と女の

考え方の違いを教えてやって欲しいという熱い思いを山藤は坂戸に語った。その手の夢追い話に、浮草稼業をやっている坂戸は弱い方だった。

男ならではの、男と男の友情話、そんな思いも、どこかに存していたのも事実だった。

そんな意向を受けて、坂戸は知里に会い、男の気持ちも分かってやればというような話をした。もつともらしい能弁が効を奏したのか、渋々ながら知里は納得はして見せた。

ところが、修行のためにニューヨークへと旅立ったはずの山藤の一連の話が、旬日後に。まったくの嘘話であることが坂戸に知れた。

何もかも、まったくの造り話であった。

結果的に、坂戸はその仰々しい嘘話の片棒を担がされていた。

いつの間にか、山藤秀光は福岡・博多の街に住み着き、あるうことか若い女性と結婚式を挙げた末に、新婚生活とやらに入っていたという事実が後々に露見した。

一方的に籍が抜かれていたので、この行為自体は私文書偽造の罪に当たり、法律的には無効のはずだったが、知里への裏切り行為ばかりは判然としていた。当人、知里に対する人間的な信義が問われる事柄であった。

偶々に、店に来た山藤の仲間の一人が口をすべらせたことで、この男の身勝手さが知れた。

訳知りふうには、男のロマンたるものを知里に解いて聞かせた坂戸の無責任さ加減も問われるべき事の推移であった。

この時点で、知里はこの事実を知らなかった。

一人、つんぼ棧敷（さじき）に置かれていた。

正直なところ、坂戸も思い悩んだが、自分にも一端の責任はあることなので、意を決して、坂戸は知里にこの事実を告げた。

余計なことだったが、それとない仲間の情報源から、山藤の移転先の住所も坂戸は調べ上げた。坂戸はその責任をおのれに問うた。

せめてもの罪滅ぼしと考え、坂戸は行動に及んだのだ。開店前の店に知

里を呼んだ。

二人きりで事の顛末記を語り合うことになった。やっと、窓明かりの光が店内を照らし出していた。覚悟のほどを、知里に言い聞かせた後、一気に事実ごとを坂戸は口にした。

事実を知らされた時、一瞬、知里は青褪め顔になったが、特に、取り乱すようなことはなかった。ややあって、知里は口を開いた。

「女の人がいるんじゃないかと思って、わたし、それで反対していたんやけど、やっぱり、そういうことやったんやね」

この後、「知里は相談する人がいるから」とだけ告げて、店を後にした。自身の心の動揺を隠すためなのか、その行動は唐突な振る舞いのようにも坂戸には思えた。

この日の夜、知里はロブ・ロイの閉店間際の時刻に再びやって来た。夕方から雨模様で、この夜の客足は伸びず、知里がやって来た時は他に客はいなかった。二人切りだった。

カウンターの左隅の席に坐り、知里はただ黙って、ジントニックのグラスを傾けていた。尋常でない態度だったので坂戸も知里には直ぐには声を掛け兼ねた。酒に身を浸していなければ身も心も持たぬといった切羽詰まった表情で、浴（あ）びるようにして、ジントニックを知里は飲み干した。

「あとで、話があるんよ。それまで声を掛けんといてえ…」

そう、告げられていたので、坂戸は時間の過ぎるのを待つしかなかった。深酒のほども、敢えて、坂戸は窘（たしな）めなかった。

「わたし、海が見たいから連れてってえな」

閉店間際の時刻、知里が坂戸にせがんだ。

最後の一滴までも飲み干すつもりか、知里は最後までグラスから手を放さなかった。

もはや、真夜中であった。坂戸と知里は店を出た。

雨は小降りになっていた。近くに停めてある車に知里を乗せた。酒は好きな方だが、彼は店では酒は一滴も飲まない。客のサービスに徹するべきだという思いのゆえだった。

やがで、車は国道二号線に入り、須磨の海岸線を目指した。時折り、車の窓に雨しぶきが撥ねた。助手席の知里は一言も発しない。

夜の海際の道を走ってから、坂戸は須磨海水浴場手前の松林の片隅に車を停めた。人の影はない。いつとき、雨は小降りになったようで、微かにだが風が吹いていた。

それでも、夜の海は荒れ模様のように思えた。沖合から寄せて来る波は、幾重ものせめぎの声を発していた。一人は相合傘で身を寄せ合っていたが、どこか、よそよそしい感じで歩いていた。波音だけを耳にしていた。

砂道に足を踏み入れた。その分、歩みが遅くなる。突然のこと、沈黙を破って知里が呟きとも思える言葉を発した。

「女も子供を産むと、魅力が無くなるんやわ。それ、仕様がないうことやのにね」

「…うん？それが何の関係があるのや」

二人とも要領の得ない会話を交わした。

そのまま、会話は途切れた。知らぬ間に美里が坂戸に身を寄せ、片腕に掴まって来た。どこか、知里の一步、一步が危かった。

「わたし、何かに掴まってへんと、このまま倒れそうなんや。なんや、足が海の方に向けて行きそうで。そうやろ。このまま歩いて行けば海の中や。楽になれるんやろ。そないなことしか、考えてえへん」

「そないな物騒なこと、言うもんやない」

慰めのつもりで坂戸は言ったが答えにはなっていなかった。更に、知里は片腕に力を込めた。坂戸の体を預けるようにし縋り付いて来た。少しだが、酒臭い匂いを坂戸は嗅いだ。

「ね、わたしを抱いてえ。ね、このわたしの体を試して欲しいいん。若い女にね。わたし、寝とられたんや」

そう激した口調で告げると、知里が坂戸の上体に蔽いかぶさって来た。その勢いに押されて、坂戸は砂地によるけ込んだ。その拍子に、相合傘が風に煽られて飛んだ。

闇の海の方角にと傘は消えた。

仰向きに倒れた姿勢で、しばらく、坂戸は受け身のままにじっとしていた。坂戸の体の上に体を重ねた知里が、何か、一言、二言も口にしたが坂戸には聞き取れなかった。

知里が顔を左右に振ったので髪の毛が頬に降りかかった。知里の体温も伝わって来た。

性急な知里の行動に直ぐには応じられず、押し倒されたまま坂戸は息を潜めた。頭のどこかに、成り行きとは言え、乱暴に事を為してはという制御の思いが兆していた。

と、何を思ったか、知里は体を振り払うと、そのままに、海の方角に歩き始めた。坂戸は止めようと手を伸ばしたが、ひらりと、知里は身を躲(かわ)わしていた。ヒールを捨てた知里の歩みは早かった。

この場合は、知里の気の済むようにしてやるのも一方法と考え直し、後は追わなかった。

遠浅の海だから、海に入ったところで死に切れるものではない。

暗闇の海には果てはないようにも思えたが、海水浴場の地でもあるので、坂戸もそれなりの事情は知っていた。

波打ち際に素足を浸した知里はブラウスを脱ぎ捨てると、次々に着ているものを剥ぎ取った。坂戸との距離は二メートルほどしかなかった。二歩、三歩と坂戸も歩み寄った。

始めから、知里は下着は着けていなかったのか、坂戸が身を寄せた時には、すでに、素っ裸になっていた。

それなりの覚悟を事前に知里はしていたのやも知れなかった。

灰白（ほのじろ）く、闇の中に、知里の裸身が浮いていた。一見、邪気のない遊びのようにも見えるが、知里の態度は真剣だった。両手を差し出すようにして坂戸を招き、知里はお出でお出での仕種を繰り返していた。一歩が遅れ、立ち竦んだままに美里に対していた坂戸に向けて、知里が声を浴びせた。

「抱いてって言ってるのにい、何してえん…」

知里の方から身を寄せて来た。

波打ち際で、しっかりと二人は抱き合った。

「わたし、もう、どうなつてもええ」

言うなり知里は坂戸の肩に顔を埋め、泣きじやくった。

坂戸の背中を何回か叩いた。

そのままに二人は砂地の上に倒れ込んだ。

待ち切れなかったのか、知里が坂戸の着ているもの総てを剥ぎ取った。瞬間に、坂戸も裸身にされていた。お互いがお互いの体温を感じ合った時、小雨が降り掛かった。

知里の冷えた身と心を暖めてやるーほのぼのとした恋情が沸いて出た。

坂戸は男と女の情合いの間（ま）におのれの一心を埋めた。

二人は貪るようにして、唇を合わせた後、いきなりに、体を繋（つな）いだ。知里がそう望んだからだった。

柔らかな砂地の上に、絡み合いの痕跡が残された。幾重にも砂が重なり溶けては崩れた。

「わたしのこと好きなようにしてえ。坂戸さん、わたしのこと、滅茶苦茶にしてええんよ」

坂戸の背中に両手を回し、知里は力一杯に坂戸を自分の側に引き寄せた。その強い欲望の気持ちに押されて、ひたすらに、坂戸は激しく知里の下腹部におのれの腰をぶつけた。

「うう、ううーっ…」

動物的な呻きの声を知里は上げ続けた。

ぐねぐねと、自分でも腰を使い、埋め込まれた物を余さず捉えようと貪欲さも示す。それにつれて、知里は絶頂感のただ中を彷徨っているのか、ぶるぶると体全体を震わせた。

やがて、坂戸が射精感に身を打たれた時、知里も果てた。ぐったりと、二人ともに、砂地の上で動かなくなった。ややあつてから、知里が坂戸に問うた。

「ね、わたしの、緩いん？あのね、そのお、締まりのことお」

「うん？そないなこと…」

咄嗟に答えられることではなかった。

知美が問い掛けているのは、男側からの交接時の実感に関することの上で、微妙な内容を含んでいた。

「そやかて、あの人、子供を産んだ女はここが緩うなるて、いつも、わたしに言うんや」

「…馬鹿な、そないことないと思うけんどな。何を気にしているんや」

「それ、誰かと比較したということやないの。ね、違（ちや）う？」

「それはどうやろか」

と、だけしか坂戸は答えられなかった。

二の腕に知里を掻き抱い姿勢のままに、坂戸は自問自答してみた。男と女の行為最中に、そのようなことを意識していたわけでもなく、

坂戸は答えに窮し、ただ、黙っていた。

二人の会話も途切れた。

ざざーと寄せる波音だけが、寄せては返す。暗い闇だけが、その答えを探っていた。

自分の体のことを相手の女と比較する―女ならではのその感情の示し方に、知里の心奥を覗き見た思いになり坂戸は愕然とした。

亭主を寝取られた？そのような言辞も、先程、知里は弄した。悔しさが、表されていた。

暗い海の彼方を、しばし、坂戸は見遣っていた。視線を泳がせた。

(このままに、波がひた寄せに寄せて来て、何事もなかったかのように、二人を呑み込めばいいものを…)

坂戸の頭の中にあらぬ思いが兆した。

なお、雨が暗い天上から降り掛けて来た。

雨は次第に強くなっていった。

「…寒いうなつたわ。なんや、寒い」

ぽつんと知里が言った。

二人の体は冷え切っていた。それで二人は体を離れた。

ささーと、波が寄せた。波が重なった。

その場を二人が離れた後、情事の痕跡は、直ぐに波に洗われてしまった。男と女の情事の夢(はかな)さを、そのようにして波は浚(さら)って行った。

4

何日間が過ぎた。

知里との情事は一度だけのことで終わった。

何度か、閉店間際になるとやって来て、それとなく知里は誘いを掛けたが、ずるずると二人の関係が続くのは良くないことだと坂戸が考え、やりわりと、その都度、坂戸は断った。

中途半端な助けを出したところで、知里のためにはならないと心を鬼にした。知里が立ち直るには彼女自身が自立心を持つべきだと、坂戸はそれなりの距離を置いた。

一生、知里の心の支えになれる自信も彼にはなかった。男と女の情はあったが、それとて危うい。深入りは禁物だと思われた。

今回の離婚騒動だが、知里の同意なしに籍は抜かれたのだから、復籍は可能だった。

だが、そんなことで片付く問題ではなかった。不実な男の背信行為は、

もはや、二人にとっては修復不可能の状態にあるはずだった。

それに、別の被害者もこの問題では生まれていた。

山藤秀光が入籍した相手の女性もまた騙された一人であることには違いなかった。お互いの間で、新たなトラブルも予想された。

知里自身は「まだ、わたしは若いし、子供も小さいから、自分なりに生きて行く。わたしの親も子供の面倒をみてくれると言ってくれているから」という主旨の発言もしており、健気な心意気を知里も見せたりしていたので、坂戸も一安心はしていた。

或る夏の夜の初めの頃、知里が店にやって来た。言葉少なくなった知里が深酔いをし、少しく取り乱した。心の均衡を失っていた。

きつとした目を坂戸に向けると、急に、知里は能弁になり坂戸に話し掛けて来た。

「ねえ、アホみたいな話、聞いてくれるやろか。わたしの生んだ子供が、あんまし、あの人に似てるもんやから、うちや、子供の顔を見てるんが辛いのにや。それで、もう、子供なら可愛いはずなのに、うちや、子供の顔を見て暮らすのんが我慢ならんや。そやろ、男の子は女親によく似るもんやとか言うけど、うちの子は、男親に似てて、顔の大きいところもあの人にそっくりや。そやから、なんや、自分の子に邪険にしてしもうて、子育ての自信もうちにはもうなっているんや。こないなこと、可笑しいんやろか」

「…そないな話かいな」

この場合、坂戸には受け答えをする資格はなかった。

とやかく言う筋合いの話でもないので、話の接穂（つぎほ）がなく、あとは、二人の間に、気まずい空気だけが流れた。

自慢げに、かつての亭主男が子供の顔写真を坂戸に見せたことがあるので、それなりに、坂戸は子供の顔付きは見知っている。ニューヨーク行きの話や彼が持ち掛けた時も、もっともらしく、子供の顔写真をこの男はちらつかせて見せた。何でも、「この子も、世界で通用する一流のデザイナー

にしたいんや」と言う話を、この時、彼は付け加えもした。

今にして思えば、嘔飯ものの話となる。

さらに、知里は言い募り、このあと、元亭主の悪口も口にした。

何を言ったのか、坂戸は覚えていなかったが、女として許せない男の文句だけは、今も記憶に残っている。

その夜の去り際、知里は坂戸には女の情は一切見せなかった。

つと、席を立つと、そのままに、知里はバーを出て行った。

他の客もいたので、この時、坂戸は通り一遍の挨拶をただけで知里を送り出した。

微かに、何か、知里は呟いたようだったが、坂戸には聞き取れなかった。

「さよなら」と、一言だけ、知里が自分に言い聞かせた文句だったのかも知れない。

知里の後ろ姿だけを坂戸は目に止どめた。

何日間が経った。

ロブ・ロイには知里は現れなくなり、殊更に、消息を探ることなく過ごしていた或日のこと、坂戸は山藤秀光の仲間の一人から、唐突な事態発展話を聞かされた。

知里は神戸の家を打ち払い、子供を引き連れて博多の地に住み着いたと言う。元妻と元亭主男との間で、どのような話が取り交わされたのかは知れなかったが、一つの解決法として自分が住む家の近くに、知里と子供が住むことを元亭主男は同意したらしく、それで引越しが為されたと言うのだが、何とも、坂戸には解(げ)し兼ねる話だった。

みんなにいい顔をして、それなりに尽くす男？ そんな曖昧な三角関係元亭主男は、この場合は選択したようだった。

また、知里の真意も坂戸は捜しあぐねた。

何にせよ、坂戸には納得の出来る話ではなかった。唯一、坂戸が類推することが出来たのは、芯の強いところのある知里が何か意地を示している

のかと思ったことぐらいであった。いずれにしる、この話に、坂戸が危うさの情を持ったのは事実であった。

やがて、九月になろうかと言う夏の終わりの頃、事は重大な事件にと発展した。店を開いたばかりの時刻、誰も客のいない場に、いつも、情報を寄越す山藤の仲間の一人から緊急の電話連絡が入った。

知里が子供を道連れにして、ガス自殺を遂げたという悲報が坂戸の耳に入った。仲間の男は仰々しく告げたあと、山藤が心の均衡を失っているようだから、今から、博多に向かう旨を口にした。それで電話は切れた。

(まさか、子供まで…)

受話器を耳にしたままに坂戸は絶句した。力なく受話器を置いた。

この悲惨な結末の結果をおのれに質すべく、坂戸は頭を巡らせた。

然(し)るべき答えなど坂戸が用意出来るはずもなかった。

人が命を絶つ—この事実の重さに、坂戸は我を失った。

(…知里は復讐を果たしたのか)。

しばしの後に、坂戸は呟いた。

それは、やっとの思いで弾き出した文句だった。

なお、呆然自失の状態が解けず、坂戸は夕まぐれの闇が棲み付き始めた仄暗(ほのぐら)いバーのラウンジ内に立ち尽くしていた。

背後の小窓の向こうから、とんとんと扉を叩く者があった。そんな気がした。空耳そのもので、それは、ふと、その時、小窓に視線を移した坂戸が読み取った人の気配とやらというものだった。

やはり、カウンターの左隅にと目が行った。幻の影を追った。

その席には、知里の苦渋の顔があった。

「父親そつくりの我が子を許せずに知里は幼な児を道連れにしたのだろうか？子供まで憎むという気持ちがあったとは思いたくはないが…子供の顔を見るのが辛い。子育てに自信がない。そうも漏らした知里の心の内を慮(おもんばか)ってやるべきなのか」

なお、坂戸は逡巡した。それらしき答えが坂戸に用意できるはずもなか

った。それこそ、訳知ったふうの物思い、一人よがりの解釈など許されるべきではなかった。

それでも、坂戸は頭を巡らせた。彼自身が心の均衡失っていたが、知里が意図的に自殺行を果たしたその経緯について仔細を追った。

何よりも、新婚生活を始めたばかりの山藤秀光の新居の直ぐ近くに知里が子供と一緒に住み付き、旬日を過ぎた末に、まるで新婚の二人に面当てのように、自殺行為を果たした知里の作為なるものに思いを致さざるを得なかった。死の抗議には違いなかった。

余りにも、シヨッキングな出来事に戸惑うばかり、只々(ただただ)坂戸は我を失い、なおも立ち尽くした。一言だけ、苦しい胸の内から坂戸は言葉を見付け、そつと言葉を漏らした。

「何もかもや。総てにさようならしたんや」
そう口にするのが、やつとのことだった。

5

「お前たち、一体、何を考えているんや。みんなで山藤秀光を支えてやるんやと?ようそんな無責任のことが言えるな。あんな男、お前らには悪いが、おれは人間の屑やと思うてるう。ほんまに嘘を吐くのが広告のうまい宣伝の方法やて、あいつ、ぬけぬけと言いつたな。何や、今度の話もその延長線にある話なんかいな。大概(たいがい)にせえや」

客の前では滅多に怒らない坂戸正秋だが、この時ばかりは声を荒げた。山藤秀光の仲間の三人の同僚たちが、この夜、秋傷けに、、ロブ・ロイ、に集まった。

「そやけど、彼がマスターに会いたがっているんです」

「何でや。おれに何の用があるんや」

「そらあ、別居生活のこと、マスターに頼んで、色々と、迷惑掛けてると思ってるからやないですか」

「そっか。ほなら、今夜でもええ。ここへ来てもらえ。敷居が高うて一人では来れんのかいな。一対一で話は付けたるう」

居合わせた同僚の一人に、坂戸は話を持ち掛けた。

その男は応じ、山藤に連絡をした。

母子心中があつてから十日ばかりが経過していた。

ささやかな葬儀が博多で執り行われた。ここにいる連中は葬儀の列に、それらしく加わつた者たちであつた。

この事件は地元の新聞に大々的に報道もされていたので、無理矢理に、新婚相手の女性は回りの者の非難もあつて、離婚の憂き目に遭つていた。当然と言えば当然の帰結だつた。

そんな訳で、山藤秀光は元妻と、自分の子供の遺骨を胸に神戸に舞い戻つた。行き当たりばつたりの、お粗末さしかないこの始末記ぶりにも、坂戸は怒りが沸いていた。

この後、居心地が悪いのか彼らは早々に店を出た。

静謐（せいひつ）さが店に戻つた。

何人かの客を相手にした後の閉店間際に、山藤秀光が店に一人で姿を現した。一見したところ、それらしく暗い表情をしていた。

「外で待つとれ」

坂戸は彼を店には入れなかつた。

店の後片付けをし、その後、坂戸は店を出た。

坂戸の運転する車に乗り、二人は神戸の西寄りの海岸線を走つた。

二人とも終始無言だつた。

途次、須磨の海岸沿いの道を車は通過した。

いつか、知里を伴つた夜道のコースであつたが、須磨の海辺には車は寄せず、さらに、西寄りの舞子の浜にと坂戸は車を走らせた。

繋がつた海岸線はどちらも海水浴場として知られていた。夏の名残りか、暗い海辺にはまだ葦簀（よしず）張りの休憩所があちらこちらに残されていた。ぱたぱたと、ビニール覆いの布片が、夜闇の中、揺れていた。

夜半時、舞子浜に二人は足を踏み入れた。先導して坂戸が歩き砂地を分けた。海の遠鳴りの音が、浪瀬の寄せる音と共に訪れた。

ふと、坂戸が足を止めた。黙って後ろから就いて来た彼も歩みを止めた。「ふーっ」と、何やら大きく息を吐いた。

「何か言いたいことがあるんやろ。そやけど、今更にお前の泣き言を聞いたところでどもならん。ここへ来た意味は何でか、お前は分かってるんか」

「何も…今度のことは、何を言われても、答えようがありません」

「答えなんか求めてはおらへん。そんな…答えがある訳もないやろ」

「そやから、あの一、知里はマスターのことが好きで、何度も抱かれたとぼくに自慢げに言うとりました。ここらの海岸で砂まみれになってとか、そないなことも告白してえ」

「アホか。もしそれがほんまの話やったら、お前、どないするんや」

「みんなぼくが悪いんやから、それがどうやとかこうやとか…そないな話
は」

「そうやったら口にすんな。それがおれに対する挨拶かいな。ただ一回だけ、海辺で抱き合ってた。それは事実や。真面目な気持ちでな。そのことで悪いことしたなんて気はないで。一度だけのことやけど、あれは真剣な人間同士のぶつかり合いやった」

「知里はマスターにも嫌われてしもうたって、えらい落ち込んだったんです。本当に死ぬ気になったんは、マスターとのこともあったからやないんですか」

「何や、この場になっても、犯人捜しをやってんのか。それでもお前男か。性根まで腐ってる奴なんやな」

自分の怒りを坂戸は抑え切れなくなった。いきなりに、この男の胸倉を取った。左手でぐいと引き寄せ、そのままの姿勢で右から一発パンチをくられた。一発で、吹っ飛び、砂地の上に、相手は倒れた。

一度、山藤は立ち上がった。よろよろしていた。

構わずに二発目、三発目も拳を揮った。

殴られる度に、立ち上がる姿勢を見せたが、相手は殴り掛かっては来なかった。頬骨を砕くような鈍い音が続いた。

「おい、悔しかったら殴り掛かって来いや。お前かて身の置き所がないんやろ。おれは殴られたつてもええでえ。それでえ、お前の気が済むんやっらそれでもええ」

いつとき、暗闇を裂くように、海岸沿いの車線道路からライトの明かりが届けられた。山藤秀光の顔を炙（あぶ）り出した。

顔だけが、これ見よがしに目の前に差し出された。

（こいつ、何や。大きい顔してるんや。そつか。父親に似た顔造りの我が子か。こないなことも知里は気にしとったんや）

ちらと、坂戸の頭を掠めた物思いであった。無抵抗の男の頬を打とうとした時、そんな思いが脳裏を掠めて過ぎたのであった。

それでも二、三発は殴った。急に、坂戸の戦意は喪失した。

嫌な思いが走った。

（こないな奴の、顔を殴ったところだ。おれは何をやっとるんやろか。

アホらしい）

さらに、気持ちが萎（な）えた。その場に、坂戸は暫（しば）し、立ち尽くした。

その機に、やつと、山藤秀光は抵抗した。坂戸の体にくらい付いて来た。その勢いに押されて、坂戸は砂地の上に転がった。

その隙に、この場から山藤秀光は逃げ去った。

その後ろ姿が不意に坂戸の視野から消えて失せた。倒れた姿勢のままに夜の空に坂戸は視線を投げた。じーと、耳を澄ます。

ひたひたと寄せる波の音が身近かであった。

やつと。坂戸は我に返った。ひとわたり、暗闇に向けて、首を回した。舞子浜の海の向こうから、時外れの汽笛の音が渡って来た。

「ぼわわー、ぼわー」と、闇が声を発した。

「何をしてんや。おれは…」

そう、呟いた後、急に、涙が坂戸の頬から溢れ出た。空しさ、虚脱感、自分の唐突な行為の稚拙さにも、この時、坂戸は気付いた。

(これから、あの男はどんな罪科を負って生きて行くのだろうか)

誰にともなく問うた。その文句が空しく返って来た。

やはり、遣る瀬ない独り言だった。

6

今夜は三か月に一回催されるダーツの大会が行われる日だった。

全員が集まる訳ではない。正直なところ、年々、大会参加者は減っている。そんなご時世でもあった。競技開始の午後七時に集まったのは七人で、ダーツ会員の三分の一しか顔を見せていなかった。

何年か前には日本でもダーツ大会が初めて開催されたもしたが、ダーツ人気は日本では今一つのもであった。

神戸では外人が寄る浜側の場所にあるキングスアームという名のビアホールでこの遊びは盛んであったが、最近では、それほどの賑わいはないと、坂戸は耳にしてもいた。

元々は、イギリスのパブで流行(はや)った遊びで、事の起こりは十七世紀から十八世紀頃と言われている。

標的は雄牛(ブル)と呼ばれる円盤で、その縁辺に時計の目盛仕様の点数表が記されていて、これに、羽根の付いた投げ矢を投げる。

標点を射た分だけの点数を競う競技だが、簡単なようにも思えるが、細目にわたつてのルールがあつて、これはこれで、それなりの難易度を要するゲームであった。

ここのルールは二百点を先にキープした者が勝ちとなる。正式には三百点ルールで争われるが、時間を要するので、この略式の方式で、*ロブ・ロイ*では勝負は進められた。

上級者だと、所要時間十分ほどで、目標点を達成可能ともなる。ダーツクラブの客は年季の入った愛好者が大半を占めており、その分、この店でも年配者が多かった。

「ロブ・ロイ」は、坂戸が店を引き継ぐ前から、この名だったし、この時、ダーツ愛好者の客も引き継いだので、六十代の愛好者も何人かいた。昔懐かしい話も得意な上客たちで、坂戸も色々と教えを乞うたことのある人生の大先輩の面々でもあった。

焼酎のサワー割りを作りながら、麻生詩織と一言二言、坂戸は言葉を交わした。彼女の指定席であるカウンターの左隅に彼女は坐を占めている。ここにこと笑っていた。

麻生詩織が名もないジャズ歌手で、地味なライブ活動をしていた二十代前半の年頃のこと、坂戸も相応の付き合い方をした。

安酒でのもてなした法も、その一つだと言えた。

やっと、シンガーソングライターらしく、その歌詞力も生かして、麻生詩織はヒット曲をものにした。坂戸の感慨分では、その歌は「大人の曲」で、男の女の情が鬱々の河の流れそのものになぞらえてうまく歌い出されていた。坂戸正秋の好きな一曲の一つになりそうだった。派手さのないジーンズ装いで、麻生詩織はどこにでもいる若者の一人に見えた。

ダーツの大会が佳境に入り、店内は賑やかになった。

お望みの濃密時間はお互い持てなかったが、それでも中年男たちの夢中ぶりに触れて、目を細めて見入っている。

「みんなええねえ。無邪気でええわ。ここへ来ると、ウチャ、神戸に帰って来た気がするんや」

やっと、詩織が坂戸に声を掛けて来た。

今は自分の生きる道を見付け出して、こうして笑みも浮かべている詩織だが、家出をして東京に向かう時は、すったもんだの騒ぎもあった。神戸・山の手の育ちの一人娘、ジャズをやっていること自体が彼女の両親には受け入れられていなかったもので、この地を離れるともなれば、なおさらに、

親の干渉なしには、ことは済まない話となったのだ。

余計な金を両親に求めないよう、アルバイトをしての音楽活動費稼ぎの日を送っていたのだので、諸般の事情ゆえに上京の費用はなし。結局のところ、旅費と当面の生活費は坂戸が用立てをした。

そんなわけで、詩織には心に期するものがあり、不遇時代の経験をそれなりに音楽活動の日々の糧としたところもあって、成功人生の一步を踏み出すことが出来たのであった。

青春の日々それぞれの一コマ一コマが、今も写真原版には写し撮られていくかのような話だった。

そんな場所としての意味もあるのかなと、坂戸は思った。

懐かしさは人の情とも繋がっていた。そこはかとなない人の顔と共に、*ロブ・ロイ*の来し方には人間の生き様の数々のストーリーなども浮いては消える。嬉しい話、悲しい物語：どうでもいいような話だが楽しい話の数々などもここにはある。

今もその人間ドラマは進行中であった。

差し詰め、坂戸正秋はその進行役と言った役どころを日々になさしていると云えた。

「ね、うちや、神戸に帰って来るたんびに思うんやけど、これほど、帰って来る度に街の様子が変わってるところってそうはないんちゃう？どんと、明石大橋かて瀬戸内の海には掛かってるしい、なんや、どえらい天突くばかりのビルがあちこちに出来てたり、カラフルなファッションビルもこれ見よがしにあちこちに現れてるしい、なんぼ、神戸もんが新しいもの好きと云うても、ちよつと、行き過ぎやないのん？」

「じゃあない。何しろや、裏山削って、海側に当たり前のように出島を造ってしまいうぐらいの大層な人種がこの街には仰山いてるさかいにな」

「あそこらあたり人工島の夢ランドなんて言うてるけど、なんやポートアイランドの名前だけ先行してて、客足の方は今一つなんやろ。あそこ、けばけばしてて、うちや、一度行ったきりで、もう、ええわってなったも

ん」

「やっぱり、昔のままの自然の光景がええな。六甲の山々に、なだらかな山裾野や。穏やかでええ。それに、昔はどこまで行っても海が目に入ったもんや。瀬戸内の海の風情とかもなかなかのもんやった。まあ、詩織ちゃんと言ったみたいに明石大橋が出来（で）て、海の風情も台無しやけんどな」

「うちや、この街の、風と光と空気、が元々は好きなんや。ここんところが微妙お、そこらへんところが何や様変わり中なん。うちや、六甲卸しの風と瀬戸内の海の輝きと、この街の空気をいつもこの身に感じてたんや。いつ、帰ってきてても新鮮やった。なんや。これに限るのになあ。マスターの言ってること、こないな、うちの気持ちとぴったり合うてるう」

そう、詩織が坂戸のもの言いに相槌を打つ。

二人とも心が打ち解け合い、合点した。

その時、店の扉が半分ほど開き、ちぢれっ毛の女が店の中を覗き込んだ。ちらと、目をやった坂戸に女は視線をくれた。

真由美が若い男を連れてやって来たようだった。直ぐに

「なんや。おじさんばっか、またにするわ」

そう、真由美は呟いた。直ぐに扉は閉まった。

（真由美も傘を借りたことなんかきれいさっぱり忘れてる一人なんやろな。昔はみんな律義で、晴れても傘だけはちゃんと返しに来たもんやで。お陰で、近頃は傘の補給ばかりしてることや）

独り、坂戸が愚痴った。

いつの間にか、詩織もダーツ大会に参加していた。会員ではなかったが、これまでに何度か詩織もゲームを楽しんだことはあった。

この店に備え付けの黄金製の投げ矢を手には詩織も無邪気な声を上げた。一声大きな声が上がった。偶然の技なのだろうが、詩織が手にした黄金矢がど真ん中の黒い点、ダブルブルに命中した。皆なが詩織を讃えた。

初代のオーナー時代から数えたら、ほぼ半世紀ほど、坂戸が、ロブ・ロ

イ、を引継いでからもこの店は十数年余が経過している。

客には媚（こ）びを売らず、それぞれにやって貰う―これをモットーにこのまま通すのがバー稼業を長続きさせる秘訣だと坂戸正秋は思うようにしている。別に人生を達観しているわけではない。

皆なが息抜きのいい時間を過ごしてくればそれでいいと思っている。

客の皆なが楽しんでくれている間の一時（ひととき）、せっせと、坂戸はグラスを磨き始めた。

きゅきゅつと、グラスが鳴る音を、それなりに聞き分けるようにしながら…。

(了)